

葉集を読む

松岡 隆子

一月の川肅々と日をのせて

岡 美穂

一月の川と言えば直ぐさま龍太の（二月の川一月の谷の中）が思い浮かぶ。厳寒の谷あいを流れる一条の川は、一月の川たることよって肅々と耀く。岡さんの見た一月の川も新玉の日に耀いて肅々と流れていた。年の初めの淑気に満ちた川明かりが清々しい。（日をのせて）に確かな写生の目が感じられる。同時作の（月明にしづもる町や初詣）や（鯉深く沈むあたりの冬日かな）、（空つかむごと凍晴の大櫓）と共に、巻頭を飾るに相応しい作品である。

その事に触れず湯豆腐掬ひをり

河本 順

何か心配事でもあるようだ。それがどんな事なのかはこの句からは想像できないが、敢えて詮索することもなかろう。当事者同士が分かっているにはよいことなのだから。

いま二人は湯豆腐を掬いながら、他愛ない会話を交わしている。その事に触れないでいるのは相手の気持ちを思い遣っ

てのことである。湯豆腐に心を温め合いながら静かに語り合う二人。ドラマのワンシーンを見るようだ。

青きもの朝餉に加へ寒土用

渡辺 正吉

立秋前の十八日間を土用というのに対し、立春前の十八日間を寒土用という。土用は一年で最も暑い時期であり、寒土用は一年で最も寒い時期である。寒土用だからと言って何か特別なものを食べるわけではないが、風邪など引かぬようにと、滋養になるものを食べるよう心掛けている。いつもの味噌汁に小松菜を入れたり、ほうれん草のお浸しの小鉢などの一品を加えたりして、寒土用の朝食の膳が整う。（青きもの）が詩語とし効果的に使われている。

子の予定決まらぬままや布団干す

加々美敦子

新型コロナウイルス感染症の拡大は収束するどころか一時感染者が激増し、一月に入ってまた緊急事態宣言が出された。年末年始の帰省も自粛モードの中ではどうなるのか、予定も立てられない状態のようだ。ともかくお天気の良い日に布団を干しておこうと、客布団をとり出す、などと、（子の予定）は帰省の予定と解釈した。帰省も旅行も制限され、初詣も分散して行うこととなり、ことごとく異例な事態となった。同時作に（溜息はつかぬ約束冬の月）とあるが、溜息のひとつもつきたくなるのは当然だ。一日も早く平穏な日常を取り戻したいと誰もが願っている。